

S.K.ランガーの 直感論の問題点

鈴木 月子

ランガーは芸術の目的は理解である^①と述べ、芸術の理解を重視し、その理解は感情全体を直感する^②として、直感の知的活動^③を認めている。しかし、神秘的かつ内的な存在を表現の対象とする事によって、直感という複雑、かつ不可思議な機能にその理解を任せるには、直感自体の持つ偶然性と神秘性の問題は大きい。確かに直感が知覚認識をする可能性は認められるが、真実と成り得るには、自己の確信が少なく、がそれは論証としては不十分である。ランガーの直感による理解を認める乍ば、次の様な疑問が新たに生ずる。

- 1) 理解したということは、直感が働いたからなのか。
- 2) 直感が働かない者に、理解はあり得るのか。
- 3) 舞踊教育に於て、理解を促す為に、いかに直感行為を求め指導するのか。

直感という複雑、神秘的な内的活動が、外的活動として理解をもたらすと考える理論は、同様に感情という私的・複雑な内的活動を、外的活動として示すものが芸術作品であるという理論と平行する。このランガーの理論展開で注視すべき点は、直感・感情等の内的な存在が、外的である理解、表現へと移行する論点の方向性である。「芸術的に優れた作品は全て感情を理解できる様に表現している^④」と述べている点でも明らかな様に、感情の表現を原点とした作品の表現及び理解は、私的、内的なる感情の表出が故に、直感に頼らざるを得ない理論展開の方向に傾いたと言わざるを得ない。なぜなら、ベスト^⑤、リード^⑥が論ずる様に、「感情には純粋な意味は無い」からである。又、私的のみならず、公的、外的にも共有し得るものが意味であるとすれば、ランガーの直感の導入は作品の意味に於ても、私的、内的の領域を脱しないところの理解を意味することになる。がランガーは作品の意味とは呼ばず趣意と呼ぶ。理由にランガーは「作品の趣意つまり、作品の本質的あるいは、芸術的意味は決して論弁的言語によって表現できない。芸術作品は表現形式であり、従ってひとつのシンボルではある^⑦。」とあげている。シンボルではあると、意味をシンボルとして主張する言語論を肯定し乍らも、一方では、非論弁的と芸術作品の意味を扱っている。これも同様に、私的、主観的領域から、外的領域へ向ける事の出来ない、作品の意味について論じている。以上の

事から、直接的、間接的にもランガーの直感論には次の問題があると考えられる。

- 1) 何を表現しているか、と言う第1義的質問に対しては、感情などの内的、私的、主観的な解答だけを生むのみである。
- 2) 上項を質問すれば、客体は作品自体に成り得ず、感情などになる。
- 3) 故に、表現された感情などの意味を作品自体の意味として考えやすい。
- 4) 感情などの意味の理解が可能であるとしても、私的、主観的領域故に、視覚ではなく知覚形式である intuition に頼らねばならない。
- 5) 感情の意味(趣意)を作品の意味とする事は、舞踊に於る身体を内的なるものの表現の為の「媒介」とする解釈から脱せない。(二元論を示す)
- 6) その結果、舞踊の「身体の動き」に対し、私的、内的なる感情の意味(趣意)を作品の意味として、直感し理解する事は、「表現形式」と「内容」の分離を招く。以上の問題点から、ランガーの直感論は肯定し難いと考えられる。

結論：感情、趣意、直感等の非論弁的かつ精神的なるものを原点とするランガーの理論からは、作品の意味を理解する方向に導かないと考える。何が表現されているか — という質問は、あたかも表現とは何か — の問題追求に不可欠なもの様に考えられがちであるが、しかしそれ以前に明確にすべき点は、客体が何であるのか — であろう。同時に、身体が表現する活動は、舞踊独特の表現形式であることを認識する必要があると考える。何が、いかに表現されていようととも舞踊作品そのものが客体であろう。従って、身体を媒介としてではなく、身体が表現するのであると言える。舞踊に於て、「知覚」は、「視覚」以上の認識能力を携えているのか — 感情などの内面性に客体の原点を置き、作品理解を頂点にかかげるランガーに問いたい。

注① S.Langer (1975): 大久保直幹訳 感情と形 (東京) 太陽社 P23

注② Ibid. P626

注③ S.Langer (1979): 池上保太訳 芸術とは何か (東京) 岩波新書 P626

注④ Ibid. P30

注⑤ D.Best (1976): Expression in Movement and the Arts (London) Lepus Books P70

注⑥ L.A.Reid (1969): Meaning in the Arts (London) Allen & Unwin P156

注⑦ S.Langer (1979): 池上保太訳 芸術とは何か (東京) 岩波新書 P80